

活動を学園全体に

1



第10回学園報告討論会で話す寺部理事長

社会人基礎力育成が大学の各学部で展開されるなか、その輪は学園全体に広げられていった。その引き金は、平成二十（二〇〇八）年六月十四日、豊田キャンパスで行われた「第十回学園報告討論会」だった。

「本日は、社会人基礎力に関するキックオフセミナーであります」
討論会の冒頭の趣旨説明で、寺部曉理事長はこの会合をこう明確に意義づけたのだった。

安城学園では、およそ四百名に及ぶ教職員がいる。その全員が参加して各設置校の取り組みの報告と意見交換を行う「学園報告討論会」が平成十一（一九九九）年から開催されており、また、年始には、一堂に会した全教職員に、理事長からその年の方針が明示される「新年交礼会」が行われる。

これらは、学園全体で取り組む共通目標を互いに確認し、学園関

係者全員の一体感と結束を醸成する重要な行事でもある。

学園報告討論会は、第一回の「元氣な大学・短期大学づくりを目指す」を皮切りに、「縦の接続・横の連携」（第二回）、「『学生・生徒・園児が元氣になる教育』とは？」（第三回）：など、テーマを変えては、学園のあり方を多面的に追究してきたが、この第十回では「社会人基礎力を活用した潜在能力の開発―教員の教育力と事務職員のマネジメント力の向上をめざして」がテーマに設定された。

大学で取り組んでいる社会人基礎力を、短期大学、高校でも活用し、高校と大学、高校と短大の教育連携を深めようというねらいがあった。社会人基礎力をうまく活用すれば、学生・生徒・園児および教職員の潜在能力を顕在能力に変換され、学園のパフォーマンス向上が期待されるという希望もあった。

社会人基礎力を学園全体にひろげようという発想の展開には、寺部理事長のある強い思いがファクションとして働いていた。

2

「この社会人基礎力は大学生になってから身につけようとしても明らかに遅いのであって、生涯学習の観点に立って家庭や幼稚園、小中学校・高校においても育てていくものである。また、幼稚園・



第10回学園報告討論会の会場

小学校・小学校・中学校・中学校・高校・高校・大学同士の教育連携が必要である。要するに、安城学園としては、生涯学習の観点に立ってこの『社会人基礎力』も意図的に組み込んで教育をデザインしていく必要がある」

寺部曉理事長は至り着いたこの思いを、会合の趣旨説明でも述べた。

この日は土曜日でもあり、久しぶりに学園の全教職員が一堂に集まって行われただけに、豊田キャンパスが誇る大講義室（階段教室）もぎっしり席が埋まって、見るからに熱気にあふれていた。

学園報告討論会では、まず「社会人基礎力を活用した潜在能力の開発」をメインテーマ、「教員の教育力と事務職員のマネジメント力の向上をめざして」をサブテーマに選んだ趣旨が寺部理事長から説明されたあと、「社会人基礎力を活用した教育あるいは学習の可能性」と題する基調講演が行われた。講師は河合塾の山本真司、小松原潤子。河合塾は社会人基礎力を教育機関で育成する事業を経済産業省から委託されているのだった。教職員たちは、それを聴講して、まず社会人基礎力とは何かを理解した。

次に、産学連携による社会人基礎力育成・評価事業に参加して弁当開発に取り組んだ家政学部管理栄養士チームのプレゼンテーションを見て、社会人基礎力に取り組むことによって得られる成果

を実感した。

そして午後は、「社会人基礎力をキーワードにした新しい教育プログラムの構築を目指して」というテーマでのパネルディスカッション。

パネリストには、外部から山本真司（学校法人河合塾）、小林一之（日本私立学校振興・共済事業団副主幹）、羽柴善典（盛田エンタプライズ株式会社総務部長）、毛受芳高（NPO 法人アスク ネット代表理事）、また大学から安藤明美（家政学部教授）、浦上拓也（経営学部准教授）が参加して、約二時間にわたって熱心に討議された（役職は当時のもの）。

3

「潜在能力開発のためには幼稚園から大学までの教育連携が大事であると再認識した」

教職員たちは、一日を費やしたこうしたプログラムで、「社会人基礎力」という言葉を初めて聞き、外部の活動や家政学部で行われた取り組みの実例を知って、社会人基礎力育成の意義と重要性を認識した。

「今後の課題は教育活動や業務でどのように展開するかであるが、今回の研修でそのヒントが示された。『社会人基礎力』育成を自分たちの評価事業にどう取り込むか検討する」といった前向きな取り組み姿勢が打ち出された。



矢作地区の伝統まつり「花のとう」

と評価されたのであった。

*

地域に関わりをもった活動を地域と共に行う―これは、高校でも同様だ。

安城学園高等学校では、「安城七夕まつり」「安城サンクスフェスティバル」をまちの人々と連携して企画し創りあげる。それは、JR安城駅から高校までの広い地域を含めた、フェスティバル会場と学校の枠を超えた、地域のまつり^①となっている。

だが、系列校それぞれの状況によって色々な反応もあった。「短期大学の幼児教育学科で取り組んでいる^②こどもまつり^③」なども、社会人基礎力育成事業と位置づけてもよいのではないかな。こんな意見から、今後どのように展開するかが考えられることになった。

愛知学泉短期大学では、子どもたちに夢を与えるまつり^④として「こどもまつり」が行われており、平成二十（二〇〇八）年まで三十回目を迎えるほどの伝統催事となっていた。学生たち自らが前期から立案・準備し、秋に地域の子どもたちをキャンパスに招いて保育の実践をする活動の場としていた。学生が企画・実践する、これこそが「社会人基礎力育成事業と位置づけてもよいのではないかな」

一方、岡崎城西高等学校では、矢作地区に四百年以上も続く伝統のまつり「花のとう」の企画・運営に参加する。高校の自主活動部が中心となり、地域の人たちと一緒に創るまつりは、生まれ変わった¹ 感がある。

「高校生の若い力とアイディアが加わり、さらに元気なまつりとなった」との評価は、決して自画自讃ではない。

4

安城学園の系列校が、地域の商店街やまちおこし団体と連携してイベントをつくりあげていくのは、学園のポリシーによるものでもある。

学園では、「まちづくりのためのひとづくり」を高く標榜している。「まち」をつくり、そして「ひと」をつくるため、地域社会を「生きた学びの場」として、積極的にまちづくりに参加するのである。地域の中でさまざまな活動を展開する、これがある意味で、高校での「社会人基礎力」を育てることにつながることにもなるのか。

高校サイドからは、その他、「クラブ活動や自主活動が社会人基礎力育成の評価シートに適應するであろう。高校版評価シートなども具体的に検討してみたい」といった意見も寄せられた。高校（安城学園高等学校・岡崎城西高等学校）においては、スポーツ系、文化系を問わず全国レベルの実力



安城学園高等学校バスケットボール部

といった要望もあり、成長段階により取り組みのノウハウの違いの必要性が浮き彫りにもなった。

＊

ともあれ、平成二十（二〇〇八）年は安城学園の「社会人基礎力育成元年」と位置づけられた。ベクトルを定めて、翌年の平成二十一（二〇〇九）年の学園報告討論会では、大学・短大・高校が「安城学園の高・大（高・短）教育連携の更なる進化を目指して！」、幼稚園が「遊びを通じて学ぶ」といったテーマをそれぞれに設定するなど、課題の追求を進めていった。こうした中で、学園の各設置校では社会人基礎力をキーワードにめざましい活動を繰り広げていった。

を発揮するクラブが多く、クラブ活動は生徒の潜在能力を開発する一因を担っているからだった。

また、幼稚園関係の教職員からは、

「幼児期の教育が社会人基礎力育成の基礎となる一番重要な時期と再認識した」

と肯定されるものの、

「（社会人基礎力は）大学、短期大学中心の内容になりがちなので、幼稚園は独自の討論会を持つことも今後考えてほしい」

産学連携による社会人基礎力育成事業は愛知学泉短期大学でも推進されていた。

食物栄養学科が手延べ^{めん}麵の製造販売やレストラン「丈山の里・いずみ庵」を経営する地元の有力企業・いずみ製菓株式会社と連携して、外食レストランのメニュー開発と食品に関する研究を行ったのだ。

具体的には、「栄養・健康情報提供に関する取り組み」「手延べ生麵のカビ発生メカニズムの解明」「地産地消をコンセプトとしたメニュー提案」を研究テーマとし、食物栄養学科の学生が三つの班に分かれて、それぞれの研究テーマに取り組んだ。

第一のテーマでは、来店者が料理を選択する際に参考になるように、いずみ庵で提供されているグラントメニューの栄養分析を行った。

第二のテーマでは、カビ発生のメカニズム解明に取り組んだ。安城市南西部の和泉町で作られる「和泉そうめん」は手延べ半生めんとして有名。その製法は伝統の技「半生返し」というこだわりの方法で、その製法上、温度と湿度の管理がむずかしく、梅雨から夏場の高温多湿の時期になるとカビが発生しやすいためだ。

そして第三のテーマでは、「食と健康」を基本的な考え方として地元の食材を活かしたメニュー



新メニューの開発に取り組む

を開発。名づけて「石焼風うどん」「サラダめん」「うどんピザ」などの新メニューを創作した。

食材のバランスや彩り、食べやすさ、調理方法、作業の段取り、価格など、一つのメニューを作り出すために、さまざまな面に配慮しなければならぬ。

「メニューが店にデビューするまでに、いかに多くの人のアイディアと労力が必要であるか」

学生たちは、食のプロフェッショナルリズムを身をもって体験したのだった。

「考え抜く力やチーム力が向上した」

「取り組みをまとめあげ、形にしていくことで達成感が得られた」

「一人ではできないこともチームでやることで成し遂げられた」

それぞれの課題に取り組んだ学生たちはいずれもこうした思いを共有した。

それは、主体性・実行力・課題発見力・柔軟性：など、社会人基礎力が培われてきたことを示していた。



幼児教育保育講座

6

愛知学泉大学家政学部・愛知学泉短期大学で構成する岡崎キャンパスにあつては、「岡崎げんき館」での事業展開が大きくクローズアップされた。

大学家政学部と短期大学がスクラムを組んで、「岡崎げんき館」を舞台に、公開講座や学生のボランティア活動による「親子のための遊びプログラム」を実施し、地域の健康づくりと子育て支援に貢献している。

「岡崎げんき館」は、市立岡崎病院跡地に建てられた、岡崎市保健所を含む、健康づくりのための複合施設である。「市民のライフステージにあった質の高い健康支援、年齢にかかわらず楽しめる生涯学習支援、夫婦が共同で子育てを行うための支援を中心に、生涯を通じ心身ともに健康に過ごせるライフスタイルや地域に根ざした「スポーツ文化の豊かさ」とその活性化に全面協力する」ことを謳い、館内は「保健衛生ゾーン」「健康づくりゾーン」「子ども育成ゾーン」「市民交流ゾーン」の四つのゾーンで構成されている。

平成二十（二〇〇八）年三月にオープンしたが、岡崎市では「P

FI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）手法」と「指定管理者制度」を適用し、施設の維持管理・運営を民間に委託。民間事業者である「岡崎げんき館マネジメント株式会社」がそれを担っている。

この運営会社は大成建設、シンコースポーツ、丸ヨ建設工業、日本水泳振興会、タスク・フォー、大成サービスの各株式会社が構成企業、環境デザイン研究所が協力企業となっているが、学校法人安城学園も構成員の一員としてこれに加わり、教育のノウハウを活用して、岡崎市民の健康づくりと子育て支援活動に貢献している。

平成二十一（二〇〇九）年度は、子育て・健康づくり支援事業の一環として、短期大学幼児教育学科と大学家政学部の教員によって、「こどもと親のための公開講座」、「健康づくり支援特別講座」、「保育者のための幼児教育保育講座」といった公開講座を開催した。

7

「こどもと親のための公開講座」は、学園の教員が、親子で楽しめる遊び講座や保護者を対象とした子育てに関する講座などを企画・実施。「親子でふれあい楽しもう」をテーマに、毎月「子育てする上で大切なこと」「育児相談」をはじめ「ねんどでくちやくちや親子で遊ぼう」「はっぱでつくろう冬のメダル」「子どもの絵はおもしろい」お父さん・お母さんにわかってほしい子どもの絵



学泉大・学泉短大のお兄さん・お姉さんと
遊ぼう！

の真実」といった親しみやすい内容で育児の手助けを行った。
「健康づくり支援特別講座」は、短期大学の食物栄養学科が中心となって、実際に調理をしながら健康な食生活について考える講座。

「地元の食材を活かした健康おやつをつくろう!」「上手に体重コントロール」といったテーマで行われたが、メタボ改善に関心が集まる当世、多くの参加者があり、内臓脂肪をため込まないための献立について学んだ。

「保育者のための幼児教育保育講座」は、現役の幼稚園教諭、保育士などを対象に講演会・講座を実施するもの。早い段階から幼児教育を手がけてきた安城学園が伝統を誇る催しで、平成二十一（二〇〇九）年で三十四回目。ちなみにこの年は、午前中は竹井史（愛知教育大学准教授）を講師とする特別講演「おもしろおもちゃを作ろう―保育者の援助と環境づくり―」、午後は「幼児のための音楽あそび」「子どもの運動能力を伸ばすために」の二コースに分かれて、約百人が熱心に聴講した。

また、これら公開講座のほか、学生らの自主活動も行われている。短期大学幼児教育学科と大学家政学部こどもの生活専攻の学生らによるボランティア活動で、学泉大・学泉短大のお兄さん・

お姉さんと遊ぼう！の呼びかけのもと、「親子のための遊びプログラム」がげんき館の託児コーナーで毎週木曜日に行われている。これが、「子どもたちの豊かな創造力を引き出す取り組み」と評価されて、げんき館の人気プログラムとなっている。

ここにも、学生たちが教師として社会に出たときに役立つ、生きた教育の現場が存在している。